

3. 合意形成の手法を活用する

(ア) きっかけをつくり、参加を促進する

(イ) 協働に向けた合意形成を図る

(ウ) 住民参加組織づくりのノウハウを理解する

(エ) ワークショップを活用する

(ア) きっかけをつくり、参加を促進する

農村環境の保全に視点をおいた地域づくりを進めていくためには、事業を契機として、農村環境の保全に対するきっかけづくりを行い、関係者の参加を促進していくことが必要。

このため、構想の検討の初期段階から、様々なコミュニケーション手法を用いて、地域の環境とそれに関わる課題の気づきを進め、関心を関係者で共有していくことが必要であり、地域社会の特性、コミュニケーション手法の特性等を十分踏まえて、適切な手法を組み合わせる進めることが重要。

なお、どのような手法を用いる場合にあっても、特定のテーマに関心がある一部の者に偏らないよう、様々な関係者の参画を促すことが望ましい。

気づき、参加促進のコミュニケーション手法

手法	方法の概要	効果、利点	制約、留意点
アンケート、ヒアリング	構想等に対する地域住民の意見や要望をアンケートやヒアリングにより聴取する方法	多数の者を対象に実施可能	質問文の作り方で結果が左右される 回答の背景につながる回答者の考え方の把握が困難
イベント、コンテスト	生きもの調査や景観評価会など各種イベントやコンテストを通じて、地域の環境への理解を深めつつ、意識の醸成を図る方法	楽しみながら参加してもらうことにより、関心の醸成を図りやすい	参加人数が限られる 幅広い属性の者が参加するよう留意
ワークショップ	地域住民との協働作業により構想の作成等を行っていく方法	参加者が自ら考えるプロセスを通じて地域の自立的な取組の醸成が図られる	議論のテーマを適切に設定し、参加者の意見を引き出す

3. 合意形成の手法を活用する

(イ) 協働に向けた合意形成を図る

環境保全の持続的な取組を確保するためには、住民が地域の環境を自らのものとして認識し行動することが重要であり、地域の関係者の理解を深め、地域の将来像を適切に描けるよう、必要な情報を様々な手法を活用し、提供していくことが必要。また、地域の特性等を踏まえつつ、様々な手法を活用し、合意形成の取組を進めていくことが必要。

このため、パンフレット等広報資料、ホームページ等のメディアを活用した広範な情報提供手法や、シンポジウムや講演会の開催による幅広い者に対する広報の実施、先進事例地区の視察や事例の勉強会の開催による理解の促進など各種の手法を活用して、合意形成を図っていくことが必要。

情報提供、合意形成のコミュニケーション手法

手法	方法の概要	効果、利点	制約、留意点
パンフレット等広報資料	提案内容、検討状況等をパンフレット等により提供する	直接、関係者の手に情報を提供することができる	準備と配布に時間や費用がかかる
インターネット	構想に関するホームページを作成し、検討の経緯、資料等を提供する	相対的に少ない費用で、幅広く情報を提供できる	インターネットを活用できる人にしか情報が伝わらない
ワークショップ	参加者が自主的に活動する学習会	自ら考えることによる意識向上	ワークショップでの意見・要望の反映に留意
シンポジウム・講演会	有識者、専門家等呼んで、講演や意見交換を行う	関係者が協力してイベントを開催することにより、共通理解の深化、地域外への情報発信になる	参加者にしか情報が伝わらない
先進事例地区の視察、勉強会	先進地区での取組を視察したり、先進地区から講師を招いて勉強会を行う	先進事例地区の取組プロセスを直接肌で感じるにより、意識の向上が図られる	参加者が限られる

(ウ) 住民参加組織づくりのノウハウを理解する

農村環境の保全に視点をいた地域づくり目標の設定に当たっては、幅広い地域住民の参加のもと、合意形成を進めるための住民参加組織づくりのノウハウを活用して進めることが重要。

住民参加組織づくりに当たって、住民参加のもとに、合意を形成しながら進めるためには、同一目標を達成するためのグループを意識的に形成し、様々な立場の人の意見を取りまとめ、行政に伝えていくことが必要。

住民参加組織づくりのノウハウの視点

幅広い手段による広域的活動

多くの異なる意識を持つ集団を連携させ、広域的に活動を展開させることにより、行政や関係機関が支援しやすい組織を作ることが必要。また、住民全員が役割を担える組織形態にすることが大切。

既存の組織の特徴を知る

様々な組織は、それぞれ別の目的を持って集まった集団で、それぞれに得意な分野を持っています。また、組織毎に活動の規模や取組みの濃淡があります。組織づくりを始める前に、既存のグループの現在の活動状況をチェックすることが必要。

目標にあわせた組織づくり

組織が担う目的にあわせて、既存組織の特徴をうまく組み合わせ、最も効果的な人員構成を考えることが必要。外部からの専門家やNPOはあくまで、情報提供者であり、理解者であることを前提に、住民組織に対して、全体で支援できる仕組みにしていく。

組織の支援体制づくり

地域づくりを円滑に進めるためには、行政や関係機関の支援が必要であり、それぞれの担当者に住民活動への参加を呼びかけることが重要。参加できなくても、活動の様子を、逐次、自治体内で情報提供していくことが、将来的に継続的な支援体制につながります。

資料：農村振興局「美の里づくりガイドライン」

住民参加組織づくりのための十箇条

- 第一条 地域住民の**意向が反映**される民主的な組織であること
- 第二条 **既存の組織**の様々な役割をうまく**活用**すること
- 第三条 世帯主だけでなく、**子供から大人まで**種々の年齢属性の意見を集約できること
- 第四条 **特技や知識**をもった集団が役割を発揮する
- 第五条 地域の資料、計画技術や専門家の紹介などの**支援を行政から**受けること
- 第六条 組織の活動状況を常に**全住民に情報**として提供すること
- 第七条 他地域の組織と**交流**を持つこと
- 第八条 **直接的な利権**の問題がからまないこと
- 第九条 住民一人一人の身近な問題から、**集落や地域全体**の問題へ**発展させる**こと
- 第十条 運営が円滑化するためには、**楽しさの演出**が十分になされること

3. 合意形成の手法を活用する

(エ) ワークショップを活用する

農村環境の保全に視点をおいた地域づくりを進めていくためには、地域が一体となったワークショップが有効。ワークショップとは、参加者が自主的に活動する学習会で、専門家の助言・指導等も得ながら住民自らが考え、意見を述べ、自分たちのものとして地域づくりを進めるもの。

ワークショップでは、住民が地域づくりの中心となって参加し、自らが作成する地域づくり目標としての認識も高まることから、農村環境の保全に視点をおいた地域づくりのための有効な手段。

ワークショップ開催の4原則

みんなで楽しく ~ワークショップは楽しい雰囲気です~

ワークショップは継続することが大切です。そのため、参加する人が緊張することなく、楽しく、また興味を持って参加する雰囲気づくりが大切です。ワークショップの目的、規模、参加者の属性に応じた雰囲気づくりをしましょう。

みんなでびっくり ~ワークショップは地域づくりのための新しい発見さがし~

日頃何気なく通っている場所でも、みんなと一緒に別の視点で見ると、新しい魅力を発見することができます。また、大人と子供、男性と女性では、まったく違ったものの見方をしていることも気づきます。今まで、当たり前だと思っていたことが、他の地域の人からみれば、当たり前ではないこともあります。お互いが、「教え、教えられ」、お互いに発見していくことが必要です。

みんなで一緒に ~ワークショップは新たなコミュニティづくり~

ワークショップは子供からお年寄り、男性から女性まで、多くの人がある一つのテーマについて、みんなで検討することができます。問題解決の合意形成を行うという単一的な目標を達成することに終始せず、集まるのが楽しいのだという雰囲気もつくっていくべきです。

みんなの思いを ~地域の自由な意見交換の場~

ワークショップでは特定の意見にかたよらず、みんな平等に積極的に提案しましょう。そして、意見が違って、違った意見を謙虚に受け止め、相手の立場に立った認識も必要となります。

ワークショップの実践フローの例

第1回ワークショップ 地域環境点検

- ・身近な地域資源の再評価
- ・改善すべき箇所の把握

第2回ワークショップ 地域の目標・ビジョンと役割分担の検討

- ・地域課題の整理(「いつ」「どこで」「何が」必要)
- ・「だれが」、「どのように」やるのかを検討

第3回ワークショップ 構想の取りまとめ、施策・事業の検討

- ・課題の中から優先的に対応すべき事項の検討
- ・対応する施策・事業の検討

農村環境の保全に視点をおいた地域づくり目標